

藤並の森

Vol.11

高知県立
文学館



「朝霧」(写真提供/森田千代子氏)

リレー随筆⑪ 丸岡明さんと鏡川——安岡章太郎

鏡川の散歩は、四季を通じていずれも良い。しかし一番いいのは、やはり夏の夕景だろう。久万郷士の子孫で、土佐から初めて県知事になった丸岡莞爾は、第二回の総選挙で動乱状態に巻き込まれて大変な目にあつた。

だが、莞爾自身は存外平然と、東京の家を売って、土佐で旧藩留守居役の家に移り住み、鏡川の辺りに能舞台を構えた家で、喜多流の師範について能をやりながら優雅に暮らしていた。

莞爾の孫の丸岡明氏は慶應の文科出身で、三田文学でも私の先輩だったが、奇詩人西山麓とは又従兄ぐらいの近い縁戚に当る人だ。だが何よりも、明さんの顔つきも体つきも、如何にも土佐っぽそのものの人で、私は最初に会った時から他人という感じがしなかった。

ただし明さんは、東京で生れ育った人だから、土佐のことは多分、私よりもご存知でなかった。土佐人らしく酒が好きで、家で飲むのも、外の飲み屋に出掛けるのも好きで、ひと頃、体をこわして医者に酒を禁じられたこともあったが、そんな場合でも時どきフラーと銀座裏などに出没して、鮎屋の湯呑みのような茶碗で番茶をちびりちびり時間をかけて飲んでいるのが、かえって酒を飲んでいる時より風情があつて、しんみりと淋しい酒を愛する人のようであつた。しかし、そんなときでも、明さんの酒は決してグチっぽくならず、いわんや怒りっぽくなることなど絶対にならないのが、明さんの特色であつた。

田中貢太郎氏の話は、井伏さんか

ら、最もしばしば何うところが多かつた。最も意外なのは井伏さんが二十六歳で田中さんに出会うまで、酒は一滴ものまなかつたという事だ。以て如何に田中さんの井伏さんへの影響力が大きかつたかを知るべきだ。私は田中さんに直接お目に掛かつたことはない。ただ田中さんの人柄も丸岡さんに近い人だつたように思われる。

丸岡明さんは、たしか昭和四十年還暦の祝いのすんだ暫く後で亡くなられたと思う。現在ではもうカンレキなどを贈る習慣も殆ど聞かなくなった。私の知っている限り、丸岡さんに赤いベレー帽を贈つたのが最後だつたように思う。

そういえば、あの還暦の会の十年ばかりも前、高知の夏期大学に講演会の講師として丸岡さんが出席された話を伺つたものだ。いや、そのときの話の模様のことではなく、話の後でハリマヤ橋あたりに飲みに行った時の話である。下駄ばきで鏡川の河原を夜風に吹かれて歩くのが、どんなに好い気分であつたかという、そんな話である。

「できたら、もう一度、酔い覚めに河原の風に吹かれて歩いてみたいものだ」が……「明さんは懐かしげに言われたが、その機会はなかった。

しかし還暦の祝いの頃、すでに明さんの体調はそんなことが許される状態ではなかった。そのことは十分御承知の上で、風合のある顔に微笑を浮かべてそんな話をなさる顔に丸岡さんの持味があつた。

(高知県立文学館名誉館長

◆次回企画展によせて◆

2001年2月20日(火)～4月8日(日)

ヨハンナ・シュピーリ没後100年
「アルプスの少女ハイジ」写真展

二〇〇一年は、「ハイジ」の作者ヨハンナ・シュピーリが七十四歳の生涯を終えてから、ちょうど一〇〇年を迎えます。

ヨハンナ・シュピーリの代表作とも言える「ハイジ」は、最も有名な児童文学の古典であり、今日でも世界各国の人々に愛されている作品の一つです。

そしてこの作品の底に流れている自然への讃歌と愛への信頼は、時代を越えて、いつも子どもたちを励まし、私たちの心を和ませてくれます。

「ハイジ」の作者ヨハンナ・シュピーリ(旧姓ヨハンナ・ホイサー)は、一八二七年六月十二日、チューリッヒ湖の南岸に近いドイツ語圏の山村ビルツェルに、六人兄妹の第四子として誕生しました。父のヨハン・ホイサーは医者、母の



ヨハンナ・シュピーリ (1827～1901)

マルガレータ(通称メタ)・ホイサーは詩人であり、宗教詩人として文学辞典でも紹介されています。そして外祖父は、ピルチェルの牧師という十九世紀スイスの知識階級の子女として育ちました。

アルプスの素晴らしい自然と多くの友人たちにも恵まれ少女時代を過ごしたヨハンナ・シュピーリ(愛称ハニー)は、父から強い意志を、母からは深い信仰と知性を受け継いでいました。

「幸運は、だれに一番美しい棕櫚の枝をさしのべるだろう。喜んで事をなし、なした事を喜ぶひとに。」これはゲーテの警句詩であり、シュピーリが七十一歳の時、看護婦学校の記年帳に書いた言葉です。

ヨハンナ・シュピーリは、母の詩に対

すると同様にドイツの文豪ゲーテに深く傾倒していました。新婚旅行の際にも、ゲーテの故郷ワイマールを訪ねています。

「ハイジ」の第一部の題名を直訳すると「ハイジの修業時代と遍歴時代」となっているのは、明らかにゲーテの教養小説「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」と同じ主人公が繰り広げる「遍歴時代」にならっているといえます。

多感な少女時代にゲーテの作品を愛読し、作家となった彼女にとって、ゲーテこそが知と愛と生の無尽蔵の泉でした。彼女の生活の知恵や人生観には、ゲーテから学んだことが多いのですが、その他にも古代ギリシャの叙事詩人ホメロス、啓蒙主義時代のドイツの劇作家であり、文芸理論家でもあったレッシング、女流詩人ドロステ・ヒュルスホフなどの作品を愛読していました。

女性がものを書くことについて何の妨げもない境遇ではありましたが、シュピーリ自身はあまりにもノーマルで心に鬱屈するものを持たず、文学で身を立て名を挙げるとかいった野心をすこしも持ち合わせていなかったとすれば、作家として出発が遅かったことも理解できるでしょう。

一八七一年ヨハンナ・シュピーリが四十四歳の時、処女作「フロニーの墓の上の一葉」をJ・Sという頭文字

だけを記した匿名の短編を出版しました。それは、彼女と親しかったドイツ人牧師が、彼女の持つ、ストーリーテラーとしての才能を評価し、少女時代の経験や思い出を書くように進めたのがきっかけでした。

そして、一八七八年、五十歳の時には、子供の小説集「ふるさとを失って」を刊行。一八八〇年には「ハイジの修業時代と遍歴時代」を「フロニーの墓の上の一葉の女流作家によって」と匿名で刊行しています。翌年には、熱心な読者や出版者の切望を受けて、ハイジの続編「ハイジは習ったことを使うことができる」を刊行。その際には「ヨハンナ・シュピーリによって」と明記されています。このように本名を名乗ったのは、「子



世界各国で出版されている「ハイジ」

アルムの山小屋



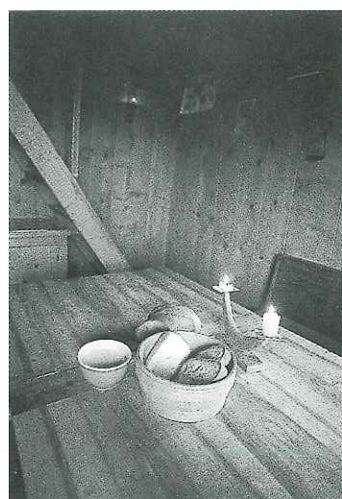
が、大きな役割を占めており、山の自然な生活の健康な美しさを飽きることなく描いています。「都会はしばしば、人の心身をゆがめ、むしろむのに反し、母なる自然は本来の人間を育てる。自分はまったく大地の子で、栄養を大地から引き出す」と彼女は言っています。

そして、この自然への帰依は、神への帰依であり、彼女の自然感情は、神への思いへと通じています。ヨハンナ・シュペーリは、道徳的、教育的には、合自然的、進歩的に個性の自発性を重んじ、宗教的には新教的で敬神の念があつた人でしたが、決して宗派的ではありませんでした。

彼女は、総計四十九篇の作品を執筆していますが、このことは、作品の中にもはつきり反映されています。決して信仰を押し付けようとはしていませんし、教育は重んじるが、大人の観念の枠に子どもを詰め込むことに強く反発しており、柔軟性を持った彼女の考え方を、私たちはこれらの作品の中から読み取ることができ、自分の考えを直接説教するのではな

どもと子どもを愛する人達のための物語」第四巻「わたしたちの国から」(一八八〇年)であり執筆活動を始めてから九年の月日が経っていました。この頃には、毎年一〜二冊を刊行する順調なペースで創作活動がなされていました。

五十歳を超えてからも、柔軟な頭で、若い人達への理解と思いやりを持って、ほのぼのとあたたかく、芯のある物語を書きつづけたヨハンナ・シュペーリ。そこには、後半期のゲーテの作品に見られる節度の中の豊かさが感じられます。彼女の物語では、美しい自然そのものの魅力とともに、人工的な教育より以上に、人間の心身におよぼす自然の健康な働き



く、物語全体の中に自然に織り込まれているのです。シュペーリの物語が、抵抗なく、しかも手応えのある快さをもつて多くの人に受け入れられているのは、そのためだと言えるでしょう。

そして、その作品の中で、永遠の名作として今日でも世界的に親しまれている「ハイジ」。「やさしさ」や「思いやり」の大切さがハイジを通して蘇ってきます。

今回の特別展では、自然の素晴らしさ、厳しさと少女の純真無垢な心を描いて洋の東西を問わず



冬、山からおりておじいさんとハイジが暮らしたハイジの家

感動を与えつづけるこの作品の舞台を「アルプスの少女ハイジ」(求龍堂グラフィックス)収録の西森聡さんの写真と文章を中心にご紹介いたします。

ヨハンナ・シュペーリ没後一〇〇年の今年、物語を背景から支えるスイスアルプスの自然とともに多くの皆様との出会いを楽しみにしています。

最後になりましたが、パネルを提供してくださいました世田谷文学館をはじめ、ご協力いただきました皆様方に、心より御礼申し上げます。

(学芸員 津田加須子)

【主催】高知県立文学館

■協賛 高知子どもの図書館

- 協力 世田谷文学館、大阪国際児童文学館、高知県立図書館、矢川澄子、求龍堂、(有) ティーズ・パブリッシング、西森聡
- スイス政府観光局、ヨハンナ・シュペーリ文庫館、ヨハンナ・シュペーリ博物館
- 後援 NHK高知放送局、RKC高知放送、KUTVテレビ高知、KSSさんさんテレビ、高知新聞社、朝日新聞社高知支局、読売新聞社高知支局、毎日新聞社高知支局、エフエム高知(順不同)

【関連事業】

- ◆記念講演会 講師・矢川澄子氏(予定)
- ◆映画会 「アルプスの少女ハイジ」
- ◆朗読の会 3月24日(土) 午後2時〜
- ◆本の読み聞かせ 2月28日(水)、3月28日(水) 午後2時
- ◆ストーリーテリング 3月10日(土) 午後2時

学芸員メモ

田岡嶺雲関係資料の紹介

①「明治二十四年

田岡家金穀出納帳」

高知県立図書館蔵

一八九一年（明治二四）八月、田岡嶺雲は水産伝習所を卒業。一年半の在学中最大の収穫は、師内村鑑三の「偽善者たるな」との箴言であった。自伝『数奇伝』によると、水産伝習所を卒業したら、国へ帰るといふ家人との約束ができていたらしい。理由は嶺雲の健康上からと、もうひとつは父亡き後の家庭事情のためであったと思われる。すでに長兄典章は妻を迎え家を出ていたし、次兄久寿弥太は東京在の叔父木村漸の養子となっていた。弟増猪はまだ中学生であった。そこで三男佐代治に田岡家継承の期待が掛けられていたようだ。間近い佐代治（嶺雲）の卒業帰国を、母蝶も養母鶴岡も楽しみに待っていたのだろう。

そんな中、嶺雲は「白百合」を思わせる女性への片思いの苦き甘さを味わい、最高学府をでてせめて「田岡某」なる存在を認めてもらいたいと発奮、家人に内緒で大学を受験する。その受験料五円を兄にも郷里へも言い出せなく悩んだ末、四谷に居た母方の伯母に、やっと事情を打ち明けて借り、無事その九月に文科大学（東大）漢文科選科入学を果たす。

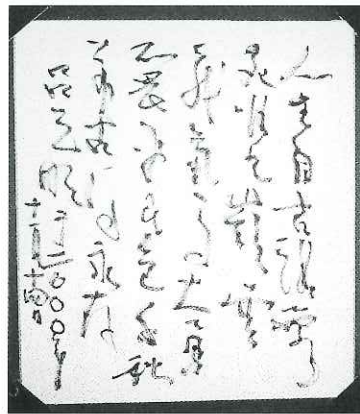
標記の「明治二十四年田岡家金穀出納帳」では、その年の六月に「金二十円 佐代治学費料トシテ二十円」、七月にも「金五円 佐代治雑費トシテ」郷里田岡家から送金されていたことを明示している。

ところで士族といっても身分の低い下級士族の田岡家を一代で盛り立てた、父

田岡亨一典臣の処世には時代を見抜いた先見性を感じられる。弟たち（木村漸・陣平）は経費が少なくすむ兵学校へやり軍人の道を歩ませた。自分の四人の息子たちにはそれぞれ官立の高等教育を受けさせた。そして自身は元士族のプライドを捨て、秩禄公債などを元手に金融業（貸金業）までやった。

だが、明治二十年三月に急逝。その後の家産管理は誰が行ったか。明治二十四年金穀出納帳には、他に「母上様小遣」「母上様入院」とかの記述もある。

下級士族であった田岡家の盛衰、田岡亨一の才覚と処世、その後の田岡家の推移など、いろいろと興味をそそられる資料である。



十一月十一日のシンポジウムのパネリス
ト、呂元明氏（中国東北師範大学教授）
が、嶺雲展をご覧になって書かれた色紙

人生古より誰か死無からんや
唯見る嶺雲の義氣の高きを
大勇畏れず平民の色
千秋萬古永存を得る

呂元明 于二〇〇〇年

十一月十四日

西田勝氏訳を参照

②嶺雲慰問文集「寄る波」

（明治四十二年六月刊）

樋口龍映・大町桂月編

高知市立市民図書館蔵
稀覯本中の稀覯本である。病んだ嶺雲を慰めるため友人たちが文章や絵や俳句を寄せ編まれた慰問文集は三冊出された。まず、明治四十二年二月に「叢雲」

が、同年六月に「寄る波」が、そして同年九月に「千波万波」が出された。

その内「叢雲」と「千波万波」は嶺雲研究家で全集編纂者の西田勝先生もご所蔵で嶺雲展図録用に写真撮影もさせていた。ただ「寄る波」だけは現物がなく、国会図書館で見づらいマイクロフィルムでなんとか読み、抜粋メモをとったが図録に写真も載せ得なかった。

さて、その「寄る波」の中に石川半山



11月26日（日）嶺雲の令孫、田岡久雄と博子夫人（京都市在住）

（一八七二―一九二五）の寄稿「北清事変回想録」がある。明治三十三年夏、嶺雲は「九州日報」、半山は「大阪毎日新聞」のそれぞれ従軍記者として中国に渡り、「太沽」で相会う。嶺雲との思い出をつづった文章の中から、その一部をここに紹介する。

「（明治三十三年七月十一日）愈々明日は帰国と決定したから、（中略）晩に阿蘇山丸に帰て見ると、嶺雲は天津以来の病氣再発で、寝て居る、ドウしたかと問ふとドウも熱が有て気分が悪るいと言ふ、ソコで我輩は勝海舟が自分の精神を以て、コレラ病に勝った話をして、貴様は弱いから病に負けるのだと嘲けつたら、嶺雲は激昂して、馬鹿を言へと言った。」

「（同七月十二日）翌十二日になると、嶺雲は蹶起した。兩人一所に上陸して領事館へ行き、それから我輩は更らに日豊洋行其他を歴訪して、十時半に阿蘇山丸へ帰ると、忽ち下痢を始めた。

（中略）我輩が熱に苦しんで居ると、枕頭に立った嶺雲が、『貴様は昨日僕の病氣に対して何と言った、貴様も亦弱いた、マママと復讐をされたが仕方ない、（中略）船員が親切に手当をして呉れた、嶺雲も時々嘲弄はしたが、然かし常に親切に介抱をして呉れた、（後略）」
嶺雲と半山の気性や当時の様子がありありと見えるようで面白い。

閲覧室から



『植物一家言』

―草と木は天の恵み―

牧野富太郎 著

③雑誌「黒白」(文芸革新号)
明治四十二年六月号
これも企画展図録に紹介の抜かった資料である。名著『数奇なる思想家の生涯』の著者家永三郎氏の尽力で一九九六年に田岡嶺雲主筆の雑誌「黒白」が名著刊行会から復刻され、その二号(明治四十二年三月刊)、三号(同四月刊)、六号(同七月刊)が奥付が抹消で不明だが)については、その内容の詳細がわかるようになった。嶺雲の「女子解放論」や「明治叛臣伝」の初出発表がどのようなかたちでなされたかがよくわかるし、その解説によって夏目漱石との逸話も知り得る貴重な復刻本である。

今回の「田岡嶺雲展」では、それに加

えて復刻に漏れていた「黒白 文芸革新号」(明治四十二年六月刊)をも展示することができた。熟知していない筆者だったが、米館された田中勲儀同志社大学教授が、泉鏡花の文章「何が故に文芸革新会に入りしか」の発表誌に出会い得たと大変喜ばれた。

さて、嶺雲の収載文は、「露麗鞭」と「静臥乱想」と「二葉亭四迷君を憶ふ」の三つである。「二葉亭」は明治四十二年五月にロシアからの帰途途上病死したロシア文学者、二葉亭四迷の死を悼んだもの。明治三十九年初頭に、飯田町の内藤湖南を訪ねた折に、唯一度、二葉亭に会っている。そして再び会う機会が永劫にあり得ぬことを憾んでいる。

「静臥乱想」は、(一)から(十)まで

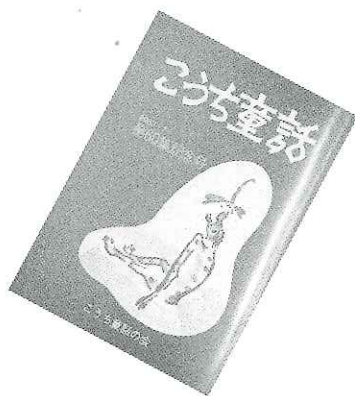
平成十一年十一月にリニューアルオープンして以来、県内外からたくさんの方が訪れ、話題になっている高知市五台山の牧野植物園。広々とした敷地の中には、植物園や温室、レストランや「植物学の父」牧野富太郎博士を紹介する記念館がある。

牧野富太郎博士(一八六二―一九五七)は、高知県高岡郡佐川町に生まれ、土佐のゆたかな自然の中で植物に囲まれて育ち、東京大学で植物の研究に没頭、その生涯を植物に捧げた学者である。研究の集大成となった『牧野植物図鑑』はいまでも読みつがれており、牧野博士の名を不朽のものとしている。

この本は、草木を愛した牧野博士の最晩年の文章が集められたもの。様々な植物について一言ずつコメントがある。意外に知らない身近な植物についての話など、全体を通じて随筆のように味わい深い。

(平成12年9月29日・北隆館 ¥2500)

県内同人誌紹介



『こうち童話』

折々の彼の想いが短文章で綴られているが、その(七)では彼の「社会主義」観が語られる。

「吾を社会主義なりといふ者あり、弱者に同情することが社会主義なる者ならば、吾は所謂社会主義者ならむ 吾は個人の不羈を尊重し、何者にも繋縛せらるゝことを嫌ふ」(後略)

大逆事件以後に書かれた『数奇伝』にも彼の主義観は載るが、大逆事件発覚一年前、幸徳秋水とも親密とも言われた時期のものとして興味深い。

その他、(七)の

「熊の顔には稚氣あり、虎は笑容を帯ぶ、獅子にすら猶慈相あり、最も憐愍なる相を有するものは人類是也。」

にも嶺雲らしい観察眼の鋭さが表れている。

て微笑を禁じ得ない。

なお、同号に「田中桃葉」の筆名で田中貢太郎の「麓の小学校」という五ペーじほどの文章が載っている。仁井田の家から東の隣村の峰寺のそばにあった高等小学校へ通った頃の思い出を綴ったものの。田中貢太郎全集が編まれていないだけに、大切にしたい初期作品である。

最後に、このたびの「土佐の反骨・田岡嶺雲展」をご覧下さった皆様、資料や写真をご提供下さったり、ご教示下さいました皆様方にこの場をかりてお礼申し上げます。

(別役佳代)

創刊は一九七〇年十月、第一集を発行して以来、年二回の発行を続けて、三十年になる。こうち童話の会を発会するに当たって、今は亡き高知新聞社記者、東岡淳助氏が、大変お世話してくださった。当時「こども高知新聞」に童話を執筆していた、市原麟一郎・上田菊江・村岡豊喜・山脇映子・平井まさね・横矢都志・山内美代子・窪田善太郎たちが中心となり無事第一集を発行することが出来た。

その初刊行の会で、東岡氏が、「これが三号で散会というようにないならないようにがんばってください。」と、注意激励されたことがなつかしく思いだされる。現在会員は約二十五名、九十六歳を筆頭にがんばっている。それも、土佐の風土、土佐人らしい人情気質から生まれでる土まみれの素朴な童話と願って創作にはげんでいる。

主宰 窪田善太郎

発行所 高知市小津町一五一六

電話 〇八八―八二三―二八八七

川島豊敏

詩集『肉體』——序より

澄みきった次の新しい世代の青年の眼の前に、恥多きわれらの時代の悲劇を、何の誇張も感傷もなく、事実のままとして受取って貰うまでの良心について、私はじめに考えるのである。かつての人々よ、いまわれわれにとって最も必要なもの、それはまことに平凡な健康な肉体と、たゆみない労働と家族と土のなかに神を見いだし愛をやしない、生きぬいてゆく非凡な生活の力である。わたし達は次代の青年の鋭い眼と、熱い血にむかつて、私達は私達にのこされた誠実の極みをここにとどめておく重大な責務を感じ、この時代に詩を書くという意義を、あきらかにしたい念願だけであると走り書きしておきたい。

昭和二十二年四月廿九日



物部川の風景

稀有の報告者

川島豊敏（一九一五—一九四八・香美郡土佐山田町）の詩集『肉體』（一九八六）は、敗戦後一年六カ月に及んだ捕虜収容所（大連）の生活をつぶさに記した記録詩である。拘留者の詩集としては、『シベリヤ詩集』（長尾辰夫）、『サンチョ・パンサの帰郷』（石原吉郎）があるがいずれも、祖国帰還を果たしてから書かれたもので、収容所内で書かれた詩集公刊は、日本ではじめてといわれる。

この詩集によって彼は、侵略戦争、敗戦という激烈な状況に否応なく攪拌された一個人が、国家の責任をいかなる形で背負い、償ったかを知らしめた「稀有の報告者」となった。

一字一字が血のような言葉で刻みつけられた手づくり詩集は、復員の折、軍服の裏に縫いつけられ、ぶじ検閲を免れたのである。極限状況下においても、詩を書く行為を人絶対行為として常におのれにとどめつづけた彼の詩は、観念の絡まりを廃し、事実を即物的に書きとめることによって、言葉はかえって切り立つ断崖のようなものとなった。掲文にみる通り、いかなる不遇に陥っても、明日に繋ぐ生を逆転的に吸引し得るにんげんの力、今はやりの言葉でいえば「詩の力」を劇的に体現した稀な詩人であった。

冒頭詩の第一行は象徴的である。

歎願前夜

昭和二十年十一月、大連地区
元日系軍人二〇〇名を連軍に
収容され便役に服す

つとめてしづかならうしている／側の

友は薬をしいた上に／着のみのまま孤をかむり／深い皺を刻み／軽い寝息をたててゐる。百名ちかい壕舎の中で／燭もなく／掌を焚火に翳してゐる。星凍る屋外では／誰彼するソ連兵の／鋭い声がして／あとは寂としてゐる。（略）

不条理の現場に突然投げ込まれた人間の叫喚、また逆に、バセティックなものほどこにもない。静謐にみちた眼ざしは、囚われびとの無気力どころか、人間であること断念させられた状況をただ見据えることしかできないことを教えてくれるのである。もはや周囲のいつさいが、おのれ一個の肉體に眼に封鎖されたのである。

タイトル『肉體』は、そのことを意味している。

而會

妻は／足もとの／名も知らぬ淡紅色のちいさい草花をつみ／われをみつめ／鉄條網ごしにそれを差しだす／それから子規の句集と／白米の「おにぎり」と。海猫屯といふ海沿いの丘で／戎克の群を指さして妻とながむ（略）

こんな詩に出あつて我々がほつとするのは、一瞬でも、川島のにくたいが妻という他者に向かつて開かれたからであらう。

一九四七年四月、物部川沿いの生家に帰った彼は休む間もなく、自転車や徒歩で引揚者救済に奔走する。が七か月後、「口髭は一寸ものびたまま、両眼はかっと見開いた」ままだ力尽きた。（国則三雄志）

見どころⅡ●野中神社（お婉堂）

●八王寺の桜

●鏡野公園

資料受贈報告

（平成二十二年九月～十一月）

敬称略

- 岡山良樹「萬葉集注釋二十卷」（卷十二欠）・本文篇・索引篇 澤瀉久孝 中央公論社）ほか：著者澤瀉久孝（おもだかひさたか・一八九〇—一九六八）は、三重県生まれで大正・昭和時代の国文学者。文学博士で京都帝国大学教授を務めました。長い学究生活を通じて「萬葉集」研究一筋に打ち込み後進を育成、昭和萬葉学の主流を形成しました。その成果が最後の著書であり主著となる「萬葉集注釋」です。この完成に對し一九六七年第三七回朝日賞が授けられました。寄贈図書は一九八二年から八四年にかけて出版された普及版です。●妻島季男「高知史蹟—五台山・三里コース—など 橋詰延壽 高知市中央公民館」ほか●乾常美「21世紀に伝えたい話 高知新聞企業編 高知新聞社」●齊藤つぎ・「想い出を散步 齊藤つぎ著刊」●吉岡郷繼「鳥形山系の花たち 吉岡重忠編 吉岡郷繼撮影・文 南の風社」●大原富枝を囲む会「故大原富枝先生を偲ぶ 大原富枝を囲む会編 大原富枝文学館」●片木英子「歩くと絵と 片木太郎 高知新聞社」●西一知「同人誌 舟の軌跡 西一知 レアリテの会」●浜田勝子「父の杖 はりまゆうき（浜田勝子）著刊」●小松弘愛・「（詩集）ハビットとVは「bit」 小松弘愛 花神社」●谷本好美「草の葉45集 草の葉同人編刊」●正曲「絃琴白鷺会」ひとすじの絃は流れて リーブル出版編 正曲「絃琴白鷺会」：古くから土佐に伝わる「土佐一絃琴」

◆◆◆文学館日誌 2000年9月～11月◆◆◆

9月

◆1～8日 雨漏事故修復のため休館。

◆9日「片木太郎の風景展」(24日まで延長)及び文学館ホール開館。◆10日 全館無料開館。◆16日 第9回「朗読の会」開催。

文学館ホールにて、まいまい塾ネットワーキングの皆様による朗読。宮部みゆき著「まひのしるべ」、中島敦著「山月記」など。参加者30名。◆19～20日「拓本教室」吉井勇の歌碑を使って。開催。文学館ホールにて。講師・妻島季男氏(書道家、書神会全国書道展審査委員)。参加者7名。小津高等学校一行来館。73名。◆23日

文学館専門講座「田岡嶺雲「教奇伝」を読む」開催。◆27日「俳句展」(10月4日まで)開催。共催・高知県俳句連盟

◆5日 第1回「カルチャー・サポーター総合実務研修会」開催。参加者10名。◆7日熊日トラベル一行来館。24名。◆11日第2回「カルチャー・サポーター総合実務研修会」開催。参加者11名。◆13日 宮尾登美子氏、阪上正信(夫妻)来館。(金沢大学名誉教授) 第3回「カルチャー・サポーター総合実務研修会」開催。参加者9名。中四国地区公立文化施設協議会一行来館。28名。◆14日 第1回文学カレッジ「山内容堂の漢詩」開催。講師・竹本義明氏(土佐女子中学・高等学校教諭)。参加者60名。◆18日 中谷吉郎 雪の科学館、柏田剛明氏ご来館。◆19日 立教女学院短期大学教授・佐藤泰平氏来館。◆21日 秋季企画展「土佐の反骨 田岡嶺雲展」(12月3日まで)開催。◆第10回朗読の会「朗読の会」足元一周年記念企画「六人の土佐の詩人たち」横村浩、岡本弥太、島崎曙海、片山敏彦、大江満雄、上田秋夫」開催。文学館ホールにて。岡村洋子氏、片岡ふみ子氏、野中久美子氏、松田光代氏による朗読。参加者60名。◆24日 大洲市立図書館ガイドの会一行来館。24名。

◆3日 中央大学教授・渡部芳紀氏(夫妻)ご来館。浜田正男氏一行来館。◆5日「第

三回児童生徒文学作品朗読コンクールと記念講演会」開催。文学館ホールにて。「第三回児童生徒文学作品朗読コンクール」本選には、地区予選を通過した23名が参加。なお上位入賞者は左記の通り。

金賞 作品名 「きつねのおきくさま」奈半利町立加領郷小学校2年 西岡瑞季さん

特別賞(亀村五郎賞) 作品名 「ボコが危篤です」須崎市立浦内小学校5年 倉橋 望さん

銀賞 作品名 「大方町立伊田小学校1年 松下夏夏さん

・南州市立香長中学校3年 長井亮親さん
・中土佐町立久礼中3年 山本顕葉さん第三回児童生徒文学作品朗読コンクール
本選入賞者と審査員の先生方

記念講演会

演題「本のみ方、味わい方」講師亀村五郎氏(日本児童文学者協会会員)。参加者80名。◆7日 カリフォルニア大学・ジャン・ジャン氏(田岡嶺雲はか日本近代思想史研究者)ご来館。◆8日 田岡佐紀子氏ご来館。◆10日 東京の大原哲夫氏(学生時代からの嶺雲愛読者・小学館勤務)ご来館。◆11日 国際シンポジウム「田岡嶺雲と現代」開催。日本社会文学会・地球交流局と共に。パネリストは西田勝氏(芸文評論家)

国際シンポジウム「田岡嶺雲

11/11に開催された国際シンポジウム「田岡嶺雲と現代」のパネリストの先生方。
左から西田勝、R.P.ロフタス、岸陽子、キム・レイホ、呂元明の各氏

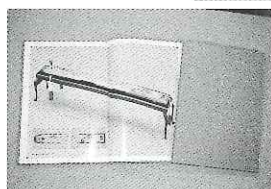
「田岡嶺雲と現代」ロナルド・P・ロフタス氏(アメリカウイラメット大学教授)「アメリカ人の見た嶺雲」、キム・レイホ氏(ロシア科学アカデミー教授)「田岡嶺雲の『世界文学』構想」、岸陽子氏(早稲田大学教授)「田岡嶺雲と王国維」、呂元明(中国東北師範大学教授)「田岡嶺雲は中国に何をもらったのか」。司会は高橋正氏(徳島大学教授)で田岡嶺雲の思想の今日的意義について、その影響について熱意あふれる発表やディスカッションがなされた。参加者約100名。韓国の呉英珍氏、金成連氏ほか、北海道、九州、奈良、京都からの参加もあった。◆14日 西田勝氏、呂元明氏ご来観。嶺雲を憶う色紙をご揮毫下さる。嶺雲の遠縁に当たる高知市の山脇さん、竹崎さん、津山市の伊藤英氏夫妻ご来館。津野輔哉氏ご来館。◆16日 慶應義塾大学教授・川澄哲夫氏ご来観。◆18日 同志社大学教授で泉鏡花研究家の田中勲儀氏ご来館。19日も。◆22日「瀬戸内文学館協議会研修会」開催。菊池寛記念館井下館長ほかご来館。◆25日 第2回文学カレッジ「土佐の反骨 田岡嶺雲」開催。講師・別役佳代(当館学芸課長)。参加者50名。津山郷土博物館・漆哲夫氏ご来館。◆26日 田岡嶺雲の令孫、田岡久雄氏夫妻(京都市伏見在住)が来館され、「土佐の反骨 田岡嶺雲」をご覧になられた。◆28日 立教女学院教授・佐藤泰平氏ご来館。◆30日 香北町戸道子氏ご来館。



このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

◆資料写真「萬葉集注釋」「ひとすじの絛は流れて」

の技芸は、今「正曲一絛琴白鷺会」の人々の手に受け継がれ伝えられています。一九五〇年に生まれたこの「白鷺会」は、多くの人々の努力と熱意に支えられ、半世紀の年輪を重ねてきました。この「白鷺会」に、平成十二年十一月三日「多年にわたる高知の伝統芸能である一絛琴の演奏法の継承と後進の育成に力をそそぎ地域文化の保護育成に大きく貢献した功績により高知県文化賞が贈られました。」「会」結成五十周年の節目の年に発行されたこの「記念誌」には、「会」の歩みや会員の「寄せる思い」などとともに、会の前史となる「土佐一絛琴の系譜」もまとめられており、興味深い読み物となっています。▼蝶発行所「蝶俳句歳時記 たむらちせい編 蝶発行所」▼高知市民図書館古書鑑賞会「山内容堂書軸 頼山陽・七言絶句「修史偶題」」

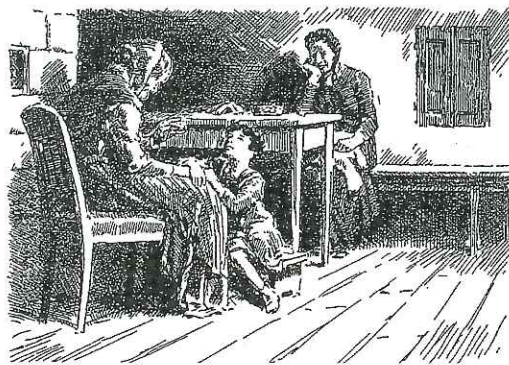


高知県立文学館カレンダー

2001年

1～3月

	1月—January	2月—February	3月—March
催しもの	■第13回 朗読の会 1月27日(土) 午後2時～4時 <内容> 「セロ弾きのゴーシュ」(作・宮沢賢治) …朗読：植田省三 「風と共に去りぬ」(作・マーガレット・ミッチェル) …朗読：大川紀男 「続・土佐とんとむかし」(監修・市原麟一郎) …朗読：大川紀男	■第14回 朗読の会 2月7日(土) 午後2時～4時 ■拓本教室～吉井勇の碑を使って 2月3日(土)／6日(火) 午後1時30分～4時 参加費…2,000円 募集人員…各8名(文学館までお電話にてお申し込みください) 講師…妻島季男氏(書道家、書神会全国書道展審査員)	
講座	〔第3回文学カレッジ〕 <日時>以下の13時30分～15時(敬称略) ●第4回／1月13日「上林暁と田中英光～土佐の私小説～」講師…山川禎彦(高知文学学校運営委員) ●第5回／2月10日「土佐の方言詩について」講師…小松弘愛(詩人) ●第6回／3月10日「寺田寅彦の欧州日記を旅する」講師…永国淳哉(学校法人日米学院・須崎ビジネス専門学校長)		
特別企画展	ヨハンナ・シュペーリ没後百年 「アルプスの少女ハイジ 写真展」2月20日(火)～4月8日(日) 永遠の名作として世界的に親しまれているヨハンナ・シュペーリ「アルプスの少女ハイジ」。自然の素晴らしさと少女の純真無垢な心を描いて、洋の東西を問わず感動を与え続ける、この作品の舞台を世田谷文学館の協力のもと、西森聡さんの写真と文章でご案内いたします。 ※入館料(常設展観覧料含む) 一般…350円　高校生以下…無料 関連催しもの ※日時未定 ★記念講演会 講師・矢川澄子氏(予定) ★映画会「アルプスの少女ハイジ」 ★朗読の会、本の読み聞かせ、ストーリーテリング		



【休館日】1月—1, 9, 15, 22, 29日　2月—5, 13, 19, 26日　3月—5, 12, 19, 26日

次回特別展予定 テラヤマ・ワールド～寺山 修司 展～きらめく闇の宇宙 2001年4月28日(土)～6月3日(日)

詩・俳句・エッセイ・映画・演劇・写真などなど、多彩なジャンルに才能を示し、時代を超えて前衛的な成果を残した寺山修司。魔術性と抒情性を生み出す表現の秘密とは？「寺山修司記念館」の膨大な収蔵品の中から厳選して展開する本展は、寺山修司の表現宇宙を紹介するとともに、生涯をかけて向かおうとしていた世界を探るものです。21世紀の始まりのいま、拡大し続ける寺山修司の宇宙をご覧ください。

利用案内

開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時30分まで)
 休館日 毎週月曜日(休日・祝日の場合はその翌日)
 年末年始(12月26日～1月1日)
 観覧料 一般350円
 特別企画展のあるときは、料金が変わります。〔一般550円〕
 20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県(市)長寿手帳所持者及び身体障害者手帳、療育手帳、障害者手帳所持者等とその介護者1名は無料です。
 駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
 貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



- 高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城下下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立
文学館

高知市丸ノ内1丁目1-20
 電話 088-822-0231
 FAX 088-871-7857
 e-mail bungaku@tosa.net-kochi.gr.jp
 http://www2.net.kochi.gr.jp/~kenbunka/bungaku/
 〒780-0850